



©小林正典



# おかげさまで 100号!

## Children, Our Future

### 子どもたちの明日

#### 目次

ニュースレター 100号の軌跡	2~3
広がる、深まる、被災地保育支援 <東日本大震災被災地支援活動>	4~5
ぼくらの地域幼稚園! <カンボジア>	6~7
温故・写真	8

2011年12月  
NO.100

認定NPO法人

幼い難民を考える会

CARING FOR YOUNG REFUGEES

は、難民となったカンボジアの子どもたちがけんめいに生きようとする姿に触発され、1980年に設立されました。子どもたちが心身ともに成長し、

その親たちが人間らしい生活環境のもとで自立できることが、難民を生み出さない平和な社会につながることを信じ、復興をめざすカンボジアで活動を続けています。

# 迷ったら、子どもが答をだしてくれる

CYRの活動を皆さまにお届けして31年。その間、日本で、カンボジアで、世界で、さまざまなことが起きました。会の創成期80年代は、バブル景気への入り口。不確かな目先の好況に世間が浮かれ始めたそんな時代にCYRを支えてくださったのは、地に足を付けた大勢の人たちの想いと行動力でした。

「なにかに突き動かされた」  
 「見ているだけではいられなかった」  
 「始めたら、やり遂げる」

このようなコメントが、当時のニュースレターの随所に残されています。心にともった灯にいざなわれるように、CYRは動き始めました。支えてくれた大切な方たちに会の活動を報告するため、CYRニュースが発行されたのです。

100号をむかえた今年、日本は未曾有の災害に見舞われる波乱の一年となりました。被災地の復興を願い、たくさんの寄付、物品、メッセージが国境を越えて寄せられました。私たちの責任は、こうした支援の橋渡しと、情報や支援者の想いをことばにして発信することです。

この重い責任と対峙して、迷わずにいられることは少なくありません。そんなとき立ち戻るのが、「迷ったら、子どもが答をだしてくれる」です。これは、CYRの設立代表である、いいぎりゆきが事務所を訪れた際に残したことばです。普遍で純粋な子どもこそが、答そのものであると。迷ったときはこのことばを思い出します。そして、惑うことなくCYRを支え続けてくださる方たちの想いに、胸を張って報告できる活動に今後も努めようと…。



1982年  
 二重面  
 ニイ成。  
 オキ  
 ち



1995年4月36号。  
 設立15周年。1月17日、  
 阪神淡路大震災発生。  
 支援に駆けつけた被災  
 地での活動を報告



1993年31号。  
 難民キャンプ閉鎖  
 に伴い、CYRニュー  
 スの名称を「子ど  
 もたちの明日」に  
 変更。78号まで日  
 英バイリンガル。  
 サイズは32号よ  
 りA4サイズに



1999年6月50号

2005年6月74号。  
 設立25周年記念号



2002年3月61号。1991年12  
 月に始めたカンボジアでの保育  
 所の自主運営と農村の生活向上  
 に向けた画期的試み「生活改善  
 資金の(小額)貸付」を特集

2006年3月  
 認定NPO

# ニュースレター 100号の軌跡

1980年3月：CYR  
 創刊号「幼い  
 未来を」発行。  
 印刷したB4用紙  
 を折りにした、B5  
 サイズの4ページ構  
 成表紙はタイのサケ  
 キャンプの子どもたち  
 (写真提供：大石芳野)



1982年3月7号。70年代以降  
 混沌とするインドシナ情勢。難  
 民の大量流出は他人事にしては  
 ならない問題だった。日本にお  
 ける難民問題を取り上げている



1987年10月  
 19号。  
 編集にカン  
 ボジア人ス  
 タッフが初  
 参加

1991年12月28号。  
 CYR カンボジア事務  
 所 (CYK) 立ち上げ



1983年1月9号。  
 この号を皮切りに、第三国定住難  
 民について考えて  
 いく



1986年12月17号。  
 翌春のカンボジア  
 難民受入数大幅増  
 加に向け、国内の  
 活動方針について  
 意見交換



1992年12月30号。  
 カオイダン閉鎖間  
 近。キャンプ活動  
 を振り返り、今後  
 の展望を考える

2001年12月60号  
 CYR、NPO法人化



2009年3月89号。  
 全ページをカラー化



2011年6月98号。3月  
 11日、東日本大震災発生。  
 被災地支援活動を報告



2006年6月78号。  
 スマトラ大地震・  
 津波 (2004年12月  
 発生) 被災地支援  
 の活動報告



2007年6月82号。カンボジアの  
 NGO「ケマラ」に協力して、都市貧困  
 層の子ども支援を開始、活動を集



2010年9月95号。設立30周年  
 を迎え、記念の活動報告会を特集

1977号。  
 法人化

# 広がる、 深まる、 被災地保育支援

## のびる幼稚園 (宮城県東松島市)

海のほど近く、景観豊かなのびる幼稚園が津波被害で全壊してから9カ月あまり、CYRは被災地に足を運び連絡を密にしてきました。状況を確認し、被災した方々との絆を深め、支援の最適化を図るためです。

被災後2度目の移転先は、長らく使用されていなかった洋装会社の施設。保育のためには施設の内外に手を入れることが必要な状態でした。「園児の居場所を守るため」、なにができるのか。園長先生と話合った末、子どもたちがのびのびと遊べる場をつくることにしました。それが、「外遊具」の寄贈です。長年、カンボジアで保育を支援してきたCYRは、そうした環境が子どもたちにとって大切であることを痛感しているからです。

そして待望の10月29日。

鉄棒、ブランコ、すべり台、お砂場が幼稚園の庭に据えつけられました！遊具を見た子どもたちは大喜び、待ちきれない様子で外に飛び出していったそうです。「幼稚園らしくなった」と、父兄の方々も喜んでくださいました。

のびる幼稚園は、数年後には自前の施設で保育を再開する予定です。新しい園でも、これらの外遊具を引き続き使っていくと、園長先生は、うれしそうに語ってくれました。



←7月訪れたと何もなかった施設  
↓11月の訪問  
園児でにぎわう園



## ピッコロルーム (宮城県仙台市)

ピッコロルームは、東日本大震災で母子・父子家庭になったり、親が求職活動中の子どもを預かる施設です。CYRの宮城県での活動協力団体「災害子ども支援ネットワークみやぎ」が仙台市のNPO「MIYAGI子どもと家庭支援プロジェクト」に働きかけて始まりまし

た。CYRはこの施設に資金援助をしています。

仙台はもともと保育所の待機児童の多い町ですが、東日本大震災後は職を求める人や、他から転入してくる人が増え、ますます入所が困難になっています。在宅の保護者を支援する施設の一時預かりも、震災後仕事のために1日中預けたり、土日預かりを希望する人が増え、対応に苦慮していました。ピッコロルームはこの施設の近くに位置しているので、今後連携し

きには  
設周辺。  
時には  
庭に！



て支援を行うことになっています。

急に子どもが熱をだした、就職活動で面接に行かなければならぬ、今夜は残業がある、明日から出張だ…。そんなお父さん、お母さんのための緊急一時預かり所として、ピッコロルームが開設されたのです。

「託児をきっかけに親の悩みを聞いて、必要な支援につなげたい」。発案者である小林 純子さんはそう考えています。

## はまっ子くらぶ (福島県会津若松市)

そろそろ本格的な冬支度が始まる会津若松市に、はまっ子くらぶがあります。この施設は、福島県の依頼を受けた全国児童発達支援協議会(本部:福岡県)が、「被災した障がい児に対する相談・援助」のための療育・放課後支援を目的に開設しました。4歳から15歳の子ども、計16名とその家族が利用しています。

専従スタッフは、言語聴覚士と保育士各1名、3月の震災で2人も被災しました。この2名に加え、協議会に加盟している全国の施設から派遣される応援スタッフ2名が、交代制で保育(療育)を担当しています。

はまっ子くらぶは、蔵を改造した古民家を借りて保育(療育)を行っています。一軒家なので、周囲に気兼ねすることなく飛んだり跳ねたり、子どもたちはのびのびと過ごします。「とにかく外でいっぱい遊ばせてほしい」という親の声に応え、近くの公園や少し離れたお城、山に出かけます。不安を抱えるおかあさんたちの、情報交換の場としても重宝されています。



古民家らしさの残る内装。本箱の上には、CYRが届けた「はらぺこあおむし」が。





開園式で贈られた人形を抱くタブロム村の子どもたち



タブロム村の地域幼稚園は、村の人々の協力で建てられた

新地域幼稚園の開園は、「子どもたちにもっと保育の機会を！」というカンボジア人スタッフの強い思いが実現したものの。簡易な建物での短時間保育。地域幼稚園の広まりは、僻地や貧困層の子どもにとって教育が身近になる可能性を宿している。

## 実を結ぶ長年の保育支援

CYR カンボジア事務所 所長

関口晴美

**10**月、カンダール州のプラサート・タブロム両村に地域幼稚園が開園しました。地元住民による自主運営のためにどのような工夫が必要か、早い段階からカンボジア人スタッフと話し合い、方針を掲げました。

開園に向け地域住民を委員とする運営委員会を立ち上げ、保育者の推薦や保育料、地域協力のあり方などについて決めてきました。両村の地区長たちは準備段階から積極的に参加、地元が主体となった保育活動の可能性を見たように思いました。

CYR が運営するバンキアン・プレイタウ保育所で経験を積んだ保育者が講師となった新保育者研修は、内容の濃いものでした。長年 CYR がカンボジアで行ってきた保育支援が実を結んだ証といえる

でしょう。その成果は、子どもの姿にも見ることができます。

保育所運営の経験を、新たな地域幼稚園の開園やカンボジア人同士のネットワークの構築に活かすことができたのは、支援者の方々のおかげです。教育を一番必要としている子どもたちに、皆さまのご支援を届けることができることを、大変嬉しく思います。

地域幼稚園の運営は、始まったばかり。先生の給与や事業運営費をどのように地域で捻出していくのかは、今後の委員会の取り組みにかかっています。このような幼稚園を増設し、一人でも多くの子どもたちにとって教育を身近な存在にするため、今後も CYR は真摯な活動に努めてまいります。

## 「現在」の支援が「未来」につながる

CYR カンボジア事務所副所長

チャン・スレイ

**新** 地域幼稚園が開園するまで、さまざまな準備をしてきました。まずは、建物の修理・建築です。大工さんと交渉を重ね、ようやく9月はじめに完成しました。次は保育者研修です。経験豊かなボラー先生とマーチ先生が、講師役を引き受けてくれました。

およそ2カ月の研修では、講習に加えて保育所での実習が行われました。直に子どもたちに接することで新保育者たちは、理解を一層深めたようです。開園が近づき幼稚園に教材や備品が配布されると、新米先生たちは自分たちのクラスを飾りつけ始めました。殺風景な建物は、見違えるようになりました。あとは、子どもたちを迎えるばかりです。

開園の2週間前に登録を開始、現在プラサートに60人、タプロムに29人の子どもたちが登録しています。バンキアンとプレイ外ウから招待された先輩園児さんたちが伝統舞踏を披露して、簡単な式に華を添えました。貧しく幼児教育に馴染みのない

タプロム村の保護者たちは、小さな子どもたちが踊る姿に驚き、一心に見入っていました。

これまで幼児教育を受ける環境になかった両村。そこに出来た学び舎で子どもたちが自らの手で扱うことのできる教材と出会い、楽しく遊びながら学び・吸収していく姿を見ることは、大きな喜びです。保育を通じて健やかに成長していくわが子の姿を目の当たりにする親たちの、教育に対する意識も変わることでしょう。地域幼稚園で子どもたちが人間の基礎を作り、立派な大人へと育ち、社会のリーダーとなってくれることを期待しています。

乳幼児期は、一生のうちで人が飛躍的に発達する、心身ともに重要な期間です。その時期の教育を担う幼稚園や保育所の役割は、大変大きなものといえるでしょう。いま現在の皆さまのご支援は、カンボジアのより良い未来に繋がります。心よりお礼を申し上げますとともに、引き続きご支援いただきますよう、お願いいたします。



プラサート村の地域幼稚園。NGOの撤退後使われずにいた建物を利用



開園式で踊りを披露したバンキアン保育所の園児たち

# 温故・写真

2006年：カンボジアのスラム



1983年：カオイダン難民キャンプ



## 【ハンモック：អង្ករ (アンルン)】

カンボジアの子どもにとってハンモックは、今も昔も「ゆりかご」のようなもの。日本でいうところのベビーベッドですね。親が働いている日中、おばあちゃんや兄弟姉妹が、軒先でハンモックを揺すりながら赤ちゃんをおやしている光景がよく見られます。カンボジアの万能布「クローマー」を使ってハンモックを作ったりもします。

## 書き損じはがき、未使用はがき、切手ご寄附のお願い

CYRでは、書き損じはがき、未使用はがき、未使用切手を集めています。カンボジアや被災地への郵送料、会員のみなさまへのおたよりに役立てられています。

書き損じはがき、未使用はがき・切手のご寄附は、寄附金控除証明書発行の対象となります。  
(はがきの寄附額は郵便局交換手数料を差し引いた額となります)

大切に活用させていただきます。ぜひ、事務所までお送りください！

※使用済みテレホンカードや使用済み切手は集めておりません。ご了承ください



＊月いち募金 (カンボジア・被災地支援) ＊  
＊給食募金＊

ご協力をお願いします！